

フィリピンカウンターパート教師研修での試み —日本語運用力を高め日本と日本人を知るためのコースデザイン—

有馬淳一・篠原亜紀

1. 背景

ASEAN10か国の主として中等教育機関へティーチング・アシスタントとして日本人を派遣する“日本語パートナーズ”派遣事業が2014年から実施されている。このプログラムにより派遣される日本人参加者（以下、NP）に対しては、派遣前、派遣中、帰国後を通して初年度よりさまざまなケアが行われている（登里2016：116-118）。

一方、NPの現地受入校の日本語教師は「カウンターパート」（以下、CP）と呼ばれ、NPが活動する上で、また生活の面においても、非常に大きな支えとなる存在である。“日本語パートナーズ”派遣プログラムの実効性を高めることを目的に、受入校および受入予定校の日本語教師を対象に訪日研修を実施するのが「“日本語パートナーズ”カウンターパート日本語教師研修」（以下、CP研修）である。

インドネシア、タイ、ベトナム、マレーシアについては、NPとのチームティーチングの基礎と実践ならびに日本理解・日本社会理解を主軸とした約2週間のCP研修が、すでに2015年度より始まっている。

フィリピンではCPの日本語運用力が総じて低いため、NPの受け入れに際して、特に授業前の打ち合わせなどでコミュニケーションに支障をきたすことがある。このため、集中的に学習することによって日本語運用力を向上できるよう、国際交流基金マニラ日本文化センター（以下、JFM）の要請によって研修期間を約2か月間とし、2016年5～7月に初めてのCP研修を行った。本稿は、国際交流基金日本語国際センター（以下、当センター）で行われた「2016年度フィリピンCP研修」（以下、本研修）の実施報告である。

2. 研修の概要

2.1 研修参加者の属性

本研修に参加したのは、フィリピン人の現職中等日本語教師12名である。性別・年齢の内訳は表1のとおりである。

表1 研修参加者の性別・年齢 (2016年3月1日現在)

年齢	男性	女性	合計
20代	0名	1名	1名
30代	2名	3名	5名
40代	2名	2名	4名
50代	0名	2名	2名
合計	4名	8名	12名

平均年齢：40.58歳

日本語教授歴は、3～5年未満が4名、5～10年未満が8名である。全員がもともと他教科の教師であり（英語7名、社会科3名、フィリピン語、家庭科各1名）、JFMで教師研修^①を受けて日本語教師となり、現在は所属校でその教科と日本語の両方を教えている。参加者の日本語能力試験の取得レベルは表2のとおりである。

表2 研修参加者の日本語能力試験取得レベル

N5合格	N4合格	N3合格	N2合格	N1合格	なし	計
6名	1名	0名	0名	0名	5名	12名

「なし」の5名は以前にN5を受験したが不合格だった。また、12名全員に訪日歴があり（内10名は10日間程度）、1年以上の日本滞在経験がある者も1名いた。表2からわかるように、言語知識は十分とは言えないものの、それに比して口頭でのコミュニケーション能力が比較的高いのが本研修参加者の特徴である。

2.2 基本方針と目標

上記のような研修参加者の背景を考慮し、また、JFMからの協力^②も得ながら、約2か月間の訪日研修では、集中的に日本語を学ぶ機会を与えることによって、参加者の日本語運用力を向上させることと、さまざまな体験活動を通して、参加者の日本や日本人についての理解を深めることを柱とする方針を立てた。

そのために、本研修の目標として以下の2つを掲げた。

- 1) 日本語の基礎的な知識を身につけて、日本語によるコミュニケーション能力を高めることによって、NPとの意思疎通を円滑に進め、より効果的な授業が行えるようになることを目指す。
- 2) 日本の生活や文化を体験して、日本や日本人についての理解を深めることによって、そ

の後の教授活動がより豊かになることを目指す。

2.3 研修内容

基本方針と目標を基に、大きく「日本語」と「日本文化」に分けて授業を組み立てた。当センターの教師研修では通常、教授法の授業があるが、本研修にはない。それは、本研修の参加者の日本語力を考えれば、教授法の理論や実践面についてはJFMでのフィリピン人講師による講義に任せ方がはるかに効率的で効果的であり、それよりも訪日研修では、日本語と文化体験の時間を増やすことによって、日本語運用力を高め、日本や日本人について理解を深めることを優先した方がよいだろうと判断したからである。

また、参加者には、日々の授業、日々の生活で気づいたこと・考えたことを記録させ、CP研修のポートフォリオを作成させることにした。

以上を取り入れて組み立てた本研修の構成イメージを表すと図1のようになる。

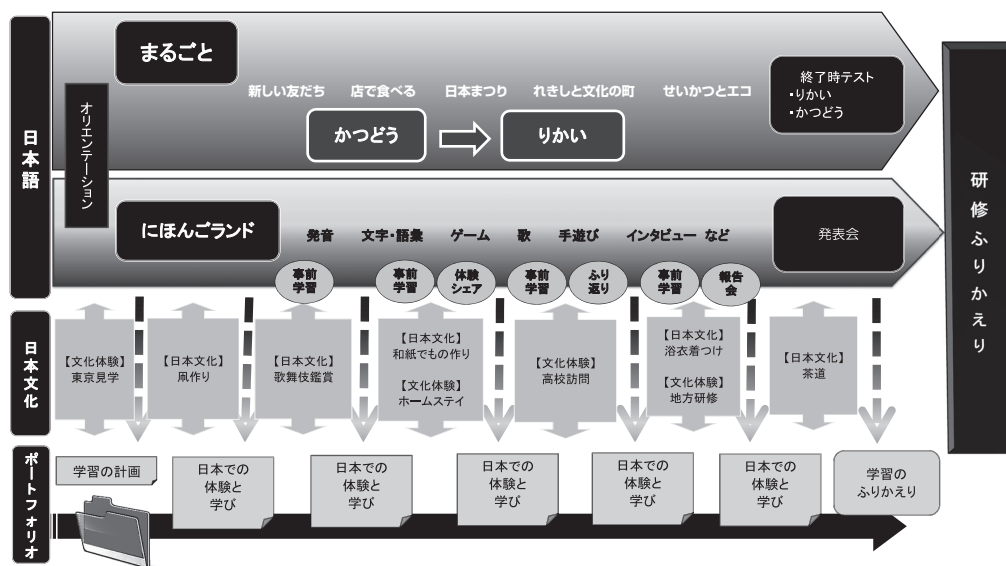


図1 研修の構成イメージ

2.3.1 日本語

基礎的な言語知識を増やし、基礎的なコミュニケーション能力を高めるために、JF日本語教育スタンダードA2レベルを目標に据えて、「まるごと」と「にほんごランド」という以下の2つのタイプの授業を設けることにした。

- ① 「まるごと」 (午前3時間×20回)

『まるごと 日本のことばと文化 初級2 A2』⁽³⁾を使用。

1つのトピックを「かつどう」(2回) → 「りかい」(2回) で進めていく。

毎回、授業の初めに10～15分程度シャドーイングをする。

終了時にテスト(「かつどう」と「りかい」)を実施する。

② 「にほんごランド」 (午後2時間×18回)

楽しみながら学び、日本語の知識を広げ、コミュニケーション能力を高める。

発音、文字・語彙、ゲーム、文化、ウェブサイト、手遊び、歌、生教材、インタビュー、パフォーマンスという10種類のテーマで学ぶ。

参加者が相談して内容を決め、練習して、最後に「パフォーマンス発表会」を行う。

午前は「まるごと」でコミュニケーション能力を養い、言語知識も整理する一方で、午後には楽しみながら学ぶ時間を設けることによって、むしろ学習効果が高まることが期待できるのではないかと考え、各回さまざまなテーマで日本語に親しみ楽しむ場所とするようなイメージで「にほんごランド」と名付けた。基本方針で掲げたように、集中的に日本語を学ぶことによって、参加者の日本語運用力の向上を目指すのが本研修の主目的ではあるものの、通常の日本語の授業が午前も午後も連日続いては参加者の学習意欲を損なってしまうのではないかと考えたためである。「にほんごランド」のテーマの中には、寺と神社がどう違うかや、J-POPの紹介など日本や日本人についてわかる内容も盛り込むように工夫した。

また、「まるごと」では研修終了時にテストを課したのとは対照的に、「にほんごランド」ではあくまでも日本語学習が肯定的で楽しいものという印象を持ってほしいと願って「パフォーマンス発表会」を最後に行った。内容も演出もすべて参加者が自分たちで考え発表した。本番の演目の一つとして、授業を担当した講師一人一人を上手に真似て研修中に受けた授業を再現する寸劇があったが、そこから本研修で参加者がどれほど多くのことを学んだかが窺えた。

2.3.2 日本文化

日本の生活や文化を実際に体験し、日本や日本人についての理解を深めることを目的として、また、日本や自国について改めて考える契機とするために、「日本文化」については、当センター内で実施可能な授業型の文化プログラムと、他の場所に出かけて行って文化体験をする外出型の文化プログラムを設けた。

当センター内で行った「日本文化」の時間として、以下の4種類(①～④)を設けた。

- ① 凧作り—日本のいろいろな凧の種類や遊びを紹介した上で、参加者が実際に凧を作ってみる。
- ② 和紙でもの作り—和紙を使って、日常生活で使える便利でおしゃれな小物を作ってみる。
- ③ 浴衣着つけ—浴衣を自分で着たり他の人に着せる練習をして、帰国後には生徒にも着せられるよう学ぶ。

④茶道一和室で、伝統的な茶道の説明を聞き、お茶会の体験をする。

外出型の文化プログラムとしては、以下の5種類(⑤～⑨)を設けた。

⑤東京見学—科学未来館や防災館を見学したり、風鈴作りを体験したりする。

⑥歌舞伎—国立劇場で歌舞伎を鑑賞する。

⑦ホームステイ—参加者1名ずつ、埼玉県内の家庭に1泊2日のホームステイをする。

⑧高校訪問—埼玉県内の高校を訪問し、校内見学をしたり世界史の授業でフィリピンについて紹介をしたり、生徒や教員と交流する。

⑨関西地方研修—3泊4日で京都・奈良に行き、各地の史跡巡りをしたり、ハンカチ染め体験をしたりする。

この他、「歌舞伎」「ホームステイ」「高校訪問」「関西地方研修」については、「文化体験事前学習」の時間(⑩)を設けた。さらに、「歌舞伎」を除く3つについては、「文化体験報告・共有」の時間(⑪)を設けた。

⑩「文化体験事前学習」(2～6時間×4回)

プログラム参加前。言語面や予備知識についての手当てをして、各体験プログラムの内容をよりよく理解しプログラムにより参加しやすくする。

⑪「文化体験報告・共有」(3時間×3回)

プログラム参加後。体験したことを報告したりシェアしたりすることによって、文化体験をふり返り、理解をより深める。

⑩と⑪は、文化プログラムと日本語の授業との橋渡しの役割を果たすものとして、CP研修共通の枠組みとして設けている。事前学習で当該文化についての理解を深めるとともに事前課題を与えることによって、参加者がより主体的に文化プログラムに参加すること、また、事後に、事前課題を報告・共有する形を採ることによって気づきやふり返りがより深まることをねらっている。

2.3.3 ポートフォリオ

授業オリエンテーション時に「研修中にやってみたいこと」を記入させ、研修中に実現できたことはチェックさせるようにした。また、研修期間中の日本語・文化の体験記録として、体験したことや発見したこと、考えたことなどを「はっけんノート」「教え方・学び方メモ」「文化体験の記録」に書かせた。体験記録はどれも英語で書いてよいこととした。研修参加者の日本語作文力に配慮したのと、気軽に書けるようにすることによって日本や日本人に関する気づきを促しやすくできるのではないかと考えたためである。

研修の最後には、作文や発表会のスクリプトなど日本語を使って自分で書いたものや、テストなど日本語学習の成果を参加者自ら選んでファイルさせるようにした。

中間時には個別面談の時間を設け、ポートフォリオを見ながら各自の学習の進捗状況を確認した。また、本研修で学んでいることがフィリピンでの自分の授業にどのように結びつけられるかをふり返る時間も設けた。研修最後のふり返りの時間では、作成したポートフォリオを元に他の人に紹介したいことを共有し合った。

3. 研修の評価

3.1 研修参加者からの評価

研修終了時アンケートで、本研修で自分の日本語力が伸びたかどうかを4段階(「4=とても伸びた」「3=伸びた」「2=あまり伸びなかった」「1=ぜんぜん伸びなかった」)で研修参加者が自己評価した結果が、表3である。

表3 日本語力の伸びに関する参加者の自己評価

	4	3	2	1	平均値
あなたの日本語の力は伸びましたか	8名	4名	0名	0名	3.67

さらに、自分の日本語で特に伸びたと思うものに「○」を付けさせたところ(複数回答可)、もっとも多かったのは「理解(読むこと)」で12名全員が選び、続いて「理解(聞くこと)」と「表現(書くこと)」が11名、また、「やりとり(話すこと)」にも9名が「○」を付けた。

それを裏づけるように、「日本語に集中的に浸かったので、聴解力がとても進歩した」や「初めての来日では話す勇気がなかった。でも、今は少し勇気を持てたと思う」などのコメントもあり、2か月間の研修で確かな手ごたえを感じたり、自信がついたりしたことが窺える。

また、表4は日本や日本人についての知識や理解が深まったかどうかを4段階(「4=とてもよくできた」「3=できた」「2=あまりできなかった」「1=ぜんぜんできなかった」)で研修参加者が自己評価した結果である。

表4 日本や日本人についての理解の深化に関する参加者の自己評価

	4	3	2	1	平均値
日本や日本人、日本文化についての知識や理解を深めることができましたか	11名	1名	0名	0名	3.92

これについては、「過去2回の訪日は慌ただしかったが、今回の研修の長さのおかげで、私たちは深く日本人と日本文化に親しむことができた」や「研修中のさまざまな活動のときに、授業で習った日本語を使って、日本と日本の人たちのことをもっと学ぶことができた」といっ

たコメントが寄せられた。

こうしたことから、日本語運用力を向上させることと、日本や日本人についての知識を深めることという本研修の2つの目標が達成できたと研修参加者に受け止められたことがわかる。

3.2 研修担当者としての評価

研修終了時の「テスト」では「りかい」「かつどう」とも概ね目標を達成する結果⁽⁴⁾が得られた。「パフォーマンス発表会」では、「にほんごランド」で学んだことを取り入れながら、参加者が協力し合って内容を考え、直前まで練習を続け本番に臨んだ。特に、演目の一つ、谷川俊太郎の詩の朗読について観客から「感動した」などの感想をもらった。また、上述の研修参加者からの評価を見ても、本研修で目指そうとした目標は概ね達成することができたのではないだろうか。

ただし、JFMの研修ではこれまで『まるごと』の「かつどう」でしか学んでこなかったため、2か月の研修を経て、「かつどうは好きですが、りかいは難しいです」と口にする研修参加者が多く、文法への苦手意識が強まってしまった感が否めない。次回以降のCP研修では、未習部分の「りかい」の取り扱いを含め『まるごと』の進め方を再検討する必要があるだろう。

研修参加者の日本語運用力が訪日前と比べ総じて向上したことは、終了時の「テスト」の結果で得られた客観的な評価からも、ふり返りの時間や研修終了時アンケートからうかがい知ることができた参加者の自覚からも疑いないところである。その一方で、「テスト（りかい）」でよい結果が得られたのは、研修期間中の参加者の様子を見て、テスト実施にあたって、試験監督が設問文や選択枝を読み上げるなどして、仮名を読む負担を軽くするように配慮した結果でもある。その点では、仮名の読み書きについては、2か月を費やしてもなお十分に高めきれなかった部分であり、今後の課題である。

4. まとめ

前述のとおり、時間割上は本研修に教授法の授業がなかった。研修期間を通じて、中間時に本研修で学んでいることとフィリピンでの授業を結びつけるふり返りの時間を設けたことと、ポートフォリオに「教え方・学び方メモ」を入れたことを除けば、特に教授法的意義を前面に出して強調したわけではなかった。

にもかかわらず、終了時アンケートに「帰国したら、普段使っている教科書に「にほんごランド」の内容を統合して授業をしたい」「にほんごランド」の授業でやって楽しかった活動を早く紹介したいからフィリピンに帰るのが楽しみ」といった声があつた。研修を受けながら、常に彼らは日本語教師の目を持って参加していたのであろう。

今後とも、JFMと当センターとで緊密に情報交換し連携し合いながら、現地における研修

と CP 研修とでいかに関連性・継続性を持たせていくかなど、CP に対するより有効な支援のあり方を模索していきたい。

〔注〕

^①JFM では、2009年から現職高校教師を対象に教師研修を開始した。当初は日本文化・日本事情を教えるためであったが、翌年からは高校生用に制作した教材を教えられるよう日本語研修も加えた（大船他 2012：159）。

^②本研修に先だって、JFM では本研修参加者を対象に延べ約40時間の事前研修を実施した。事前研修では、本研修での使用教材に合わせて、『まるごと』初級1「かつどう」の内容を復習した。

^③『まるごと 日本のことばと文化』はJF日本語教育スタンダードに準拠した日本語コースブックで、「初級2 A2」は「かつどう」と「りかい」という2つの冊子からなる。「かつどう」はコミュニケーションの力を伸ばすことを目的に、「りかい」は、文字、語彙、文法、文型の理解を目的に作られている。「かつどう」の時間では参加者のコミュニケーション能力を高めることを、「りかい」の時間では日本語に関する知識を増やし整理することを目指した。

^④本研修で扱った課の内容に基づいて『まるごと』の「りかい」と「かつどう」のテストを実施した。「りかい」はディクテーション、聴解、文法、読解、漢字の読みの問題構成（100点満点）で、最高98点、最低72点、平均点87.8点だった。「かつどう」は、単文の朗読、インタビュー、ロールプレイから成り、評価者1名が3段階評価（最低1、最高3）を行った。平均値は2.46だった。

〔参考文献〕

大船ちさと・和栗夏海・松井孝浩・須摩亜由子・フロリンダアンパロ A パルマヒル (2012) 「「プログラムの継続性」と「学習の継続性」を目指した日本語教育導入の試み—フィリピンの中高等教育における実践から—」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、151-168、国際交流基金

登里民子 (2016) 「「日本語パートナーズ」派遣事業の概況」『国際交流基金日本語教育紀要』第12号、113-120、国際交流基金